

中学校音楽科におけるリコーダー指導の意義 ーバロック楽器、教育楽器としての特性を生かしてー

17141004 土井善可

1. 論文構成

はじめに	Ⅲ リコーダー指導の課題と提案
Ⅰ バロック時代から現代に至るまでのリコーダーの変遷と音楽史	1 バロック音楽を題材としたリコーダーの導入
1 バロック時代におけるリコーダーの活躍	2 楽譜と運指
2 バロック時代の楽器から教育楽器へ	3 表現活動の工夫
3 音楽史の位置付け	おわりに
Ⅱ 教育楽器としてのリコーダー	楽譜・参考文献一覧
1 バロック音楽を用いた学習の例	
2 学習指導要領と器楽指導の変化	
3 リコーダーの特性	

2. 研究の目的

本研究は、「なぜ日本の学校教育ではリコーダーを扱うのか」ということに着目し、音楽科における器楽の基本的な教材として用いられているリコーダーを学習する意義をあらためて問い、リコーダー指導の在り方について考察するものである。そもそもリコーダーは、バロック時代に代表される旋律楽器であるが、現在の日本の学校教育では演奏の容易な教育楽器の一つとしてしか扱われていない向きがあることから、もっとリコーダー本来の楽器の特性を生かした教育はできないものだろうか、という疑問を持ったことに問題の端を発している。そこで本研究では、リコーダーを、バロック時代に栄えた楽器として、楽器本来の特性を生かす「バロック楽器」として指導すべきであるという視点と、学校教育の音楽科で器楽を指導するための一つのツール、「教育楽器」として指導すべきであるという視点のこれら二つをもって、それぞれの利点を生かしつつそれらを総合した実りのある指導方法について考察することを目的とする。

3. 論文の概要

本論文の第Ⅰ章では、リコーダーが活躍したバロック時代とその前後の音楽史から、リコーダーの活躍と衰退を明らかにし、教育楽器として扱われるまでの経緯について述べた。また、学習指導要領や音楽の教科書を参考に、学校教育における音楽史の学習の取り扱いについて考察した。続く第Ⅱ章では、バロック音楽とリコーダーを関連づけて発展的な学習を行った先行研究についての考察と、学習指導要

領の変遷からリコーダーの学習や器楽教育の取り扱いがどのように推移したかを精察して、リコーダーの特性を様々な視点から述べた。これにより、教育楽器としてのリコーダーの位置付けや認識が明らかとなった。第Ⅲ章では、これまで述べたバロック楽器としての特性と教育楽器としての特性の双方を生かしたリコーダーの総合的な指導の方法を、現在の学校教育における器楽学習の課題と共に提案した。

4. 考察の結果

本研究では、中学校音楽科においてリコーダーを学習する意義を、リコーダーに関する歴史や特性を考察しながら述べた。リコーダーは、バロックの時代に盛んに演奏されていた優れた楽器であったが、学習指導要領や教科書からは、「教育楽器」という視点に重きが置かれていることを強く感じ取れた。また、学習指導要領に「リコーダー」という楽器名が初めて明記されたのは、平成元年度版の小学校第三学年の表現の内容においてであるが、それは様々な形の「笛」に代わって、リコーダーが登場し、のちに器楽教材の中心となったのである。リコーダーは楽器の扱いや奏法の点で確かに簡易ではあるものの、バロック時代に活躍した立派な木管楽器であるため、中学校においてはリコーダーを教育楽器という一面だけで捉えず、楽器本来の特性を理解した上で学習すべきであると考え。なぜなら、教員がリコーダーという楽器の歴史的側面について言及しなければ、生徒たちは単にリコーダーを教育楽器としての一つとしか見なさないこととなるからである。そこで、中学校におけるアルトリコーダーの導入の流れを、バロック時代に活躍した楽器という視点をもって提案した。また、音楽が苦手な生徒においても簡易楽器という認識から脱却するため、「指番号譜」(駒形 2016)と楽譜を組み合わせた新たな指導の提案を行った。さらに、タンギングの指導の工夫やリコーダー学習における合奏方法の工夫も述べた。これらの考察から、リコーダーの学習において、指導者はリコーダーだけでなくバロック音楽の学習もすることで、より工夫のある、かつ楽器の歴史的背景を踏まえた指導ができるということが明らかになった。

5. 主要参考文献

- 有道惇・片山峰緒 1987 「学校音楽教育におけるリコーダーの扱いをめぐって-楽器の改良を通して-」『岡山大学教育学部研究集録』第75号 153-168
- 沖公智 「音楽教育に於けるリコーダーについて」『三重大学教育学部研究紀要 教育科学』第41巻 113-119
- 小原光一他 2016 『中学生の音楽1』『中学生の音楽2・3上』『中学生の音楽2・3下』『中学生の器楽』: 教育芸術社
- 樫下達也 2015 「古楽器の鑑賞をととして木管楽器の学習を深化させる授業の試み-バロックフルートとルネサンスフルートの生演奏による授業」『音楽教育実践ジャーナル』第12巻第2号 64-75
- 駒形加奈子 2016 「『楽譜を読むこと』が苦手な生徒が意欲的に取り組めるリコーダー指導一指番号譜の開発をととして-」『教育実践研究』第26巻 109-114
- 文部科学省「学習指導要領データベース」インターネット, <https://www.nier.go.jp/guideline/index.htm> (2020/08/27、2020/11/10 にアクセス)
- 山中和佳子 2015 「戦後の音楽科教育におけるバロック式リコーダーの導入」『福岡教育大学紀要』第64巻 24-32

音楽科と国語科の関連を図った小学校における授業展開 —教科横断的な授業を実現する教師の発想転換を視点として—

17141006 松井 夏海

1. 論文構成

序論	II-4 音楽科における授業展開の例
I 音楽科と国語科の指導事項のつながり	II-5 本題材における教科横断的な視点
I-1 小学校音楽科の授業で重視される指導事項	III 音楽科と国語科の関連を図った授業の問題点と解決策
I-2 小学校国語科の授業で重視される指導事項	III-1 音楽科と国語科の関連を図った授業における問題点
I-3 音楽科と国語科を横断する指導事項	III-2 教科横断的な授業の実現に向けての 2 つの視点
II 音楽科と国語科の関連を図った授業実現の可能性	結論
II-1 音楽科と国語科の関連を図った授業の可能性	参考文献一覧
II-2 音楽科と国語科の関連を図った授業の提案	
II-3 国語科における授業展開の例	

2. 研究の目的

現在、小学校の授業においては、2017 年告示の学習指導要領総則解説編にて「教科等の枠の中だけでなく、教育課程全体を通じて目指す教育目標の実現に向けた各教科等の位置付けを踏まえ、教科横断的な視点をもってねらいを具体化したり、他の教科等における指導との関連付けを図りながら、幅広い学習や生活の場面で活用できる力を育むことを目指していくことも重要となる」（文部科学省 2017:48）と記し、各教科の関連付けによる授業の可能性と学びの幅について言及した。関向央奈（2018:19）は教科横断の根幹には国語科があり、大きな役割を持つ要の教科であると指摘している。しかし現在の学校教育において、教科横断的な視点に基づいた授業実践に対して消極的であり、実践例も数少ない。これらの現状を踏まえて、国語科と音楽科を関連させた指導の可能性を検討した安中陽子（2011:52-53）が、「教師側が少しだけ意識を変え、発想の転換を図ることで、関連を図ることは可能」と指摘しているように、教科横断的な授業の実現に向けては、教師の発想の転換が必要であると考えられる。その前提として、教科横断的な授業の実現に向けて、それぞれの学習指導要領の分析・比較が必要となる。そこで、各教科における指導事項を明確にし、そこから共通点を見出すことによって、発想転換へとつなげていくことが肝要となろう。本研究では、国語科と音楽科のそれぞれの学習指導要領を分析・比較し、教師の発想転換をもとに教科横断の授業展開を考察してそれぞれの学びを引き出せるような授業デザインを考案し、今後の授業に生かしていくことを目的とする。

3. 論文の概要

本論文の第 I 章では小学校学習指導要領の音楽科と国語科の比較・分析を行い、横断する指導事項を見出す。そして第 II 章では、前述した内容をもとに国語科と音楽科の関連を図った授業の提案を行う。

今回は小学校第4学年を対象とし、両科目に共通する「ごんぎつね」を題材に授業を行う。まず、国語科の授業2時間で「ごんぎつね」の読み取りや朗読表現と登場人物の心情面の分析を行い、その後音楽科2時間で、国語科の学びを元に歌唱表現につなげていく。最終的に、歌唱・朗読・間奏演奏(リコーダー)での合奏を行う。そして、この授業例の学習指導案を提示する。また、学習指導案ではどの活動内容が国語科と音楽科で横断しているのか表示している。そして第Ⅲ章では、現職の教員にアンケート調査を行い、教科横断的な授業の実現に向けて考えられる問題点や現状についてまとめ、それらの意見をもとに、解決策を導き出す。

4. 考察の結果

本研究では教科横断的な視点で授業を行っている事例が少なく消極的な現状に注目し、今後の教育現場で実現していくためにどのようなことが求められているのか、また、どのような可能性が考えられるのかを授業提案を含め考察した。まず、国語科と音楽科の学習指導要領の分析・比較から、“ことば”と“おと”のかかわりに重点を置いた授業を多角的な視点からとらえることができるでしょう。そして両科目に共通の題材である「ごんぎつね」を例に具体的な授業提案を行った。国語科では主に感情を表すことばに注目し心情の読み取りを行い、音楽科では国語科の学習をもとに歌唱表現や器楽表現につなげる活動を行うことで、さらに深い学びへつながる内容を考察した。今回は“ことばとおと”に重点を置いたが、第Ⅰ章で述べたように「伝統的な言語」と「伝統音楽」を関連させた授業も考えることができる。本研究で例に挙げた「ごんぎつね」だけでなく、これから様々な可能性を見つけることができた。

しかし実際の小学校では、教科横断的な授業の実現に対し様々な問題に直面している状況である。例えば、教科担当制との兼ね合いや教科書会社の違い、担当教科外の知識不足などが挙げられ、教科横断的な授業を実現するためには、これら問題を超えていかななくてはならない。これらの問題を解決するためには、学年の教員間での連携をとることや、担当外の教科の情報共有などが考えられる。そして、そこから“教科担当間での情報共有・連携から生まれる視点”と“担当する教科に対して様々な方向から題材を見る視点”の二つの視点が重要だという考えに至った。この二つの視点をもとにこれからも教科横断的な視点での授業実現に向けてさらに研究を進めていくことが必要だと考えられる。

5. 主要参考文献

- 安中陽子(2011)「音楽づくりにおける音と言葉のかかわり—国語科との関連を図った小学校音楽科の実践—」『音楽教育実践ジャーナル』 pp.52-53
- 小原光一ほか(2020)『小学生の音楽④』教育芸術社 pp.70-71
- 甲斐陸朗ほか(2020)『国語四下 はばたき』光村図書出版 pp.12-33
- 関向央奈(2018)「国語科と音楽科における関連的な指導の可能性—「鑑賞」・「批評」・「語彙」から見る指導内容の関連性—」『横浜国大国語教育研究』No.48 19
- 文部科学省(2017)小学校学習指導要領 総則編 平成29年7月告示 p.48
- 文部科学省(2017)小学校学習指導要領 国語編 平成29年7月告示 pp.76-114
- 文部科学省(2017)小学校学習指導要領 音楽編 平成29年7月告示 pp.57-85